論文

四十八願の成就文

齋藤蒙光

〔抄録〕

『無量寿経』の中に四十八願の成就文があるとする説について、その起源と法然の解釈の意義を探った。諸師の『無量寿経』末書の中に「願成就文」の用例はないが、浄影寺慧遠が「成就」、玄一が「願成就」の語を用いている。『無量寿経』の依正二報の説明の中に一々の本願と対応する文があることについては、慧遠が述べている。さらに憬興は二六種の願について、その該当箇所を指摘している。おそらく法然は、慧遠や憬興の記述より着想を得て、四十八願がすべて成就していることを繰り返し説く。もっとも、それは第十八「念仏往生」願の成就を強調するためである。法然は『選択集』第三章において第十八願以外の願成就文を挙げるが、その草稿本である廬山寺本から、四十八願すべての成就文を特定していたわけではないことが読み取れる。善導・法然の念仏思想が強く投影されている第十八願・第十九願の成就文にこそ、法然の独自性があると考えられる。

キーワード　法然、四十八願、成就文、憬興、述文賛

一、はじめに

浄土宗祖・法然房源空（一一三三―一二一二）の本願解釈に関する研究の一環として、[1] 今回は四十八願の成就文に関注目する。法然はその主著と位置付けられる『選択集』第三章において、第十八願のみならず第一「無三悪趣」願、第二「不更悪趣」願、第二十一「具三十二相」願についても成就文も挙げ、「初自無三悪趣願終至得三法忍願、一一誓願、皆以成就」[2] と説く。こうした法然の言葉により、浄土宗義では『無量寿経』の中に四十八願それぞれの成就文が記されると受け止められている。しかし法然遺文にすべての願成就文が記載されているわけでもなく、また実際に『無量寿経』の文中より四十八種の成就文を漏れなく見出すのは難しい。そのように語る法然の言葉

の背景や、その解釈の意義について読解してみたい。

二、先行研究

「本願成就文」に関する論文は、法然およびその門弟の思想を研究する先学によって数多く発表されている。もっとも、そのほとんどは第十八「念仏往生」の願を中心に論じており、四十八種の願すべてを対象とする研究は存外に少ない。

藤田宏達氏は、『無量寿経』の成立史を解明する研究の一環として、願文と成就文との対応関係に注目する。[3]『大阿弥陀経』の第二、三、六、十二、十八、二十三願は『平等覚経』で削除されているが、その成就文を本文中に確認することができる。一方、『平等覚経』で追加された三種の願については、成就文が見つからないと指摘する。また藤田氏は、国土に関する願である『大阿弥陀経』の第二十六願と『無量寿経』の第三十一、三十二願との間に直接的な連絡はないと指摘し、次のように述べる。

> 後の宗学義的解釈によると、その（筆者注：安楽国土の依正二報の）描写はほとんどすべて本願文と対応関係にあるとみなされているが、しかし事実はそのように完全に対応しているわけではない。[4]

本願の内容は、極楽浄土の描写とは異なった視点から、増加しまとめられていったものであるため、経典全体としては一貫性を欠く結果となったのだと藤田氏は分析している。[5]

金子寛哉氏[6]は、この藤田氏の指摘を問題提起と受け止め、四十八願の一々の願文と成就文とを対応関係に捉える解釈の起源を辿っていく。曇鸞・道綽・善導の著述においては、阿弥陀仏の浄土の依正二報が本願の成就によるとする解釈は見られるものの、同一『無量寿経』内に各願と対応する成就文があるとする指摘は見られないという。また良源（九一二―九八五）の『極楽浄土九品往生義』、源信（九四二―一〇一七）の『往生要集』、珍海（一〇九二―一一五二）の『決定往生集』『菩提心集』にも、「願成就文」の用例は見られなかったという。続けて金子氏は、法然の著述より「願成就文」に関する記述を抜き出し、浄土宗二祖聖光（一一六二―一二三八）撰『浄土宗要集』の「願成就者、法然御房（コッ）仰ラレシカ。異人云ス（ハハ）」[7]という記述を傍証としつつ、「本願文に対する「願成就文」が同一『無量寿経』の中にあると指摘されたのは浄土宗祖法然だったのではないか」[8]と推測している。

三、四十八願成就文の起源

金子氏は「願成就文」という語句に着目しながら、浄土教書の記述を調べたようである。結果、「このような願成就文があるとする説は浄影寺慧遠の『無量寿経義疏』及び嘉祥大師吉蔵の『無量寿経義疏』も勿論見られない」[9]と述べている。だが、『無量寿経』に目を通したことのある者なら、上巻前半の四十八願文と、それ以降下巻前半までの阿弥陀仏の依正二報の文との間に、似通った表現が散見することに気が付くはずである。そのように経典全体の構成を俯瞰する視点は、浄土五祖の思想書よりも、むしろ『無量寿経』末書と関連することが予想されよう。そこで筆者は再度、『無量寿経』末書の記述に着目し

てみた。

初の『無量寿経』末書として著された浄影寺慧遠（三三四―四一六）の『無量寿経義疏』には、金子氏も指摘する通り、具体的に一々の願の成就を指摘する文言は見当たらない。ただし慧遠は次のように記してもいる。

自下第二明二其成就一、謂成二法身浄土之果一。然此所成遂二四十八之大願一、応二別対レ之文顕一、可レ知。文中有レ二。一略明二所成一。二仏告阿難無量寿仏威神已下、広明二所成一。[10]

慧遠は『無量寿経』上巻の後半を「成就」すなわち「法身浄土の果」を明かす部分と位置付けている。それは四十八願を遂げたことによる「所成」と記されているため、「法身浄土」とは摂法身願と摂浄土願を指すと思われる。慧遠は「応に別して之に対すべきこと、文に顕らかなり」と、それぞれの本願と個別に対応するところが文中にあることを指摘し、それが以下、略広に述べられていくと記す。また『無量寿経』下巻の冒頭に関しても、慧遠は似た解釈を記している。

自下第三明二其所摂一、摂二取十方有縁衆生一、同往二彼国一、以レ法化益。然下所摂遂二上所発四十八願一、一一別対相顕、可レ知。文中有レ四、一摂二下人一同生彼国。二一「無量寿仏威徳無極」下、摂二取上人一同生二彼国一。三一「彼国菩薩皆当究竟一生」已下、重摂二下人一同生二彼国一。四「弥勒白仏於此世界幾許菩薩生彼」已下、重摂二上人一同生二彼国一。[11]

ここから摂衆生願によって摂取されるところが説かれるのだと慧遠は位置付けている。以下の「所摂」は、上述の四十八が成し遂げられ結果であり、「一々に別して対する相顕らかなり」という。

吉蔵（五四九―六二三）撰『無量寿義疏』[12]および恵谷隆戒氏による法位（七世紀頃）撰『無量寿経義疏』復元本[13]、また元暁（六一七―六八六）撰『両巻無量寿経宗要』[14]には、管見の限り関連の記述は見当たらなかった。

次に義寂（七世紀―八世紀）撰『無量寿経述義記』[15]である。義寂は「四十八願為レ因、得二二十九種功徳荘厳一」[16]と述べているように、世親『往生論』の二十九種荘厳功徳成就を重要視している。よって『無量寿経』上巻後半の安楽国土の依報についての説明では、『往生論』を繰り返し引用している。『無量寿経』上巻前半の四十八願の発願についても、『往生論』を多く記すが、いくつかの願については、『平等覚経』や『大阿弥陀経』、『悲華経』などから対応する文を引用している。特に第一願については、次のように記される。

第一令国無悪趣願、理実浄土五趣倶無、経説二「横截五悪趣悪趣自然閉」一、論云二「勝過三界道」一故。[17]

義寂は、極楽浄土には三悪趣のみならず、五趣のすべてが存在しないのだと述べ、その典拠として『無量寿経』下巻の「横截五悪趣」の文を挙げる。わずか一か所ではあるが、『無量寿経』の中から願文と対応する文を抜き出している。

玄一（七世紀―八世紀）撰『無量寿経記』上巻は、他師と同様、具体的に成就文を指摘するわけではないが、『無量寿経』上巻の後半について「経曰〈自然音楽〉至〈深楽寂滅〉、述曰、自下第四願成就」[18]と記している。法然に先立って「願成就」と記している点は注目に値

する。

そして憬興（七世紀―八世紀頃）の『無量寿経連義述文賛』（以下、『述文賛』と略す）である。そこには次のような問答が記されている。

問、諸仏本誓為レ同為レ異。異即違三華厳云二「一切諸仏悉具一切願満方得成仏一」故。若同者、亦違二薬師十二本願弥陀四十八願一故。

答、無レ有下一仏少二一願行一而成レ道者上。故悉同也。然以レ対二所化之機縁不同一故、薬師仏於二此土衆生一、十二大願救二現在苦一、縁既熟故、不レ説レ有二十二願一。由レ此諸仏所有誓願、雖レ有レ未二必遂果一、而法蔵菩薩所発之願皆有二成弁一。故四十八願略有三意。(19)

憬興は、諸仏は互いの本誓をすべて共有しているのか否かと自問する。その答として、諸仏はあらゆる願を共有しているが、薬師仏と阿弥陀仏とでは所化の機縁が異なるため、別々の本願が取り沙汰されるのだという。そして、諸仏の願の中にはいまだは果たし遂げられていないものもあるが、法蔵菩薩の発した願は、すべて「成弁」、つまりは成就していると述べるのである。その後、憬興は四十八願の一々の願文について説明していくが、そこでは成就文については言及されない。

憬興は、『無量寿経』上巻の後半について、次のように解釈を始める。

経曰「阿難白仏」至三「成仏現在」一者述云、第二申二所成果一。即身土之果、遂二誓願一而成故。有レ二。初略申二所成一、後広顕二所成一。(20)

慧遠の解釈をほぼそのまま踏襲し、「所成の果」を明かすと述べる。続けて「略して所成を申す」ところでは、義寂などと同様、世親の『往生論』の偈文を引用しているが、「広く所成を顕す」ところでは次のように記す。

経曰「仏告阿難」至三「一仏刹土」一者述云、此第二広申二所成一。応下対二前願一、別申中所成上。但恐煩レ言、略顕二果勝一、有レ四。一歎二仏身果一、即願二仏身一之報。二申二其眷属一、即願二菩薩声聞一之報也。三歎二仏土妙一、即求二浄土一之果也。四顕二其所作一、即摂生願之果也。…初又有レ四。此初釈迦自歎、有レ二。此初対レ劣歎レ勝、即**願二光無勝一之報**也。(21)

憬興は「仏告阿難」より「一仏刹土」にかけての、阿弥陀仏の光明が讃嘆される所より以降は、「応に前の願に対して、別して所成を申すべし」という。釈尊および諸仏が阿弥陀仏の仏身を歎ずるのは摂仏身願の報いであり、続いてその眷属について言及されるところは、摂衆生願の中の菩薩声聞に関する願の報いであるという。また第三に浄土の妙なることが説かれるところは摂浄土願の果、第四の「所作（後の該当部分では「所摂」となっている）」は摂衆生願の果だという。そして憬興は、釈尊が光明について歎じるこの部分は、「光の無勝なることを願ずるの報」だという。第十二「光明無量」願の報果ということであろう。(22) なお、『無量寿経』では続けて十二光仏が説かれる。その中の清浄光・歓喜光・智慧光に対する憬興の解釈が、法然の『逆修説法』三七日に踏襲されていることは先行研究において指摘されている。(23) よって法然が『述文賛』を読んでいることは明らかである。

以下、憬興は四十八願の「所成」を次々と指摘していく。

経曰「其有衆生」至二「皆蒙解脱」一者述云、此第二見者獲利也。「三垢滅」者即除レ障利、「身意歓喜」即生レ善利、「得二苦休息一」者抜苦利、「皆蒙解脱」者即得楽利、皆是蒙二光触一レ体者**身心柔軟願（第三十三）之所致**也。経曰「無量寿仏」至二「又復如是」一者述云、此第三諸聖共歎、即**無量諸仏悉咨嗟称名願（第十七）之報**也。経曰「若有衆生」至二「又如今也」一者述云、第四聞光獲利、即**投報体礼喜天人致敬願（第三十七）之所成**也。[24]

経曰「声聞菩薩」至二「所能知也」一者述云、第二申二其眷属一、有レ四。此初例顕二寿量一也。即**天人寿無能校知願（第十五）之所成**也。経曰「又声聞菩薩」至二「不可称説」一者述云、此第二顕二衆無数一、即**願二声聞無辺一（第十四）之所成**也。『往生論』名二衆荘厳一故、頌云二「天人不動衆、清浄智海生」一故。経曰「神智洞達」至二一「一切世界」一者述云、此第三略歎二徳勝一、即**願レ得二他心智（第八）・宿命智（第五）・説一切智（第二十五）・智慧弁才（第二十九・三十）等一之所成**也。[25]

経曰「無量寿仏」至二「随応而現」一者述云、第二弁二道場樹一、有レ三。此初道樹体相也。一里三百歩故、四百万里即十二万由旬。応下前**菩薩少功見二道樹一願上（第二十八）而成**也。[26]

経曰「目覩其色」至二「無諸悩患」一者述云、此後見聞獲利、有レ二。此対レ境得レ利也。由二昔**諸根不陋願（第四十一）力一之所レ得**故、云二「六根清」一而言二「深法忍」一者即達二無相生性一故。[27]

経曰「黄金池者」至二「弥覆水上」一者述云、此第三池荘厳也。前堂舎及此池、皆由二**第三十三願（正しくは第三十二）之所成**一也。[28]

経曰「阿難彼仏」至二「神通功徳」一者述云、第四顕二其所摂一、有レ二。初生之報勝、即摂二他方一願力所成也。後住之報妙、即摂二自土一願之所成。初又有レ二。此初正報微妙也。「色身」者則此**真金願（第三）之報**、「妙音」者即**説一切智願（第二十五）之所成**、「神通」即者**供養他方仏願（第二十三）果**也。「功徳」者即**受持諷誦（第二十九）・梵行（第三十六）・総持（第三十四）・三昧（第四十二・四十五）等願之遂果**也。経曰「所処宮殿」至二「涅槃之道」一者述云、此後依報殊勝、即**万物厳麗（第二十七）・衣服随念（第三十八）等願力所成**。…無二苦可レ因故、即**楽如無尽願（第三十九）之報**也。経曰「其諸声聞」至二「無極之体」一者述云、第二旧住報勝、有レ二。初正報勝、後依報妙。初又有レ二。此初直顕報勝也。「同一類」者即**応二第四願一之報**也。「虚無無極」者無障故、希有故、如二其次第一、即**求那羅延力願（第二十六）之報**也。[29]

憬興は阿弥陀仏およびその眷属と安楽国土の依報荘厳に関する経文を解釈するにあたって、第三・四・五・八・十二・十三・十四・十五・十七・二十三・二十五・二十六・二十七・二十八・二十九・三十・三十二・三十三・三十四・三十六・三十七・三十八・三十九・四十一・四十二・四十五願という、二六種の願の成就を指摘しているのである。

もっとも右の『述文賛』の文中において、憬興は「願成就」とは記さず、「報」「所致」「所成」「所得」「果」「遂果」などの語を用いている。特に慧遠も用いていた「所成」という表現が多用され、二か所「願力所成」という表現が見られる。まず正報について「初生の報勝、即ち他方を摂する願力の所成なり。後住の報妙、即ち自土を摂する願の所成なり」と記している。ついで「万物厳麗」願および第三十八「衣服隨念」にもその語を用いているため、広く安楽国土の依正二報について表現していることになる。

なお、『無量寿経』下巻の前半では、往生人や安楽国土の菩薩のことが説かれる。それについて憬興は、『述文賛』の下巻の冒頭において次のように記す。

経曰「仏告阿難」至二「及不定聚」一者述云、第二弁二衆生往生因果一、即遂二摂衆生願一而申二往生一。(30)

ここから「衆生往生の因果」が説かれると述べ、摂衆生願の遂果として往生が説かれるという。もっとも憬興はそれから「正定聚」の解釈に専念し、第十八願をはじめ往生行に関する本願の成就には言及しない。その後、「一生補処」「三十二相」など、四十八願文と共通する語句を含む文についても、憬興は願成就には言及しない。

ここまでをまとめると、慧遠は『無量寿経』上巻の後半以降を「成就」の段と呼称しており、玄一は「願成就」と呼称している。また慧遠は『無量寿経』の依正二報に関する文の中に、四十八願の一々と対応するところがあると述べている。もっとも慧遠をはじめ諸師の大半は、四十八願成就の該当箇所を具体的には記していない。『無量寿経』文中においてそれを指摘するのは、筆者が今回眼を通した末書の中では、憬興の『述文賛』のみであった。憬興は『無量寿経』上巻後半の依報荘厳に関する経文を解釈するにあたり、二六種の本願の成就を指摘している。そこでは、安楽国土の正報や他方国土の聞名の利益について誓う願の成就についても指摘されている。その反面、憬興は『無量寿経』下巻前半の正報の解釈においては、四十八願との関連性に言及しない。

四、法然における四十八願成就文の受け止め

まず、法然が文治五年（一一八九）に東大寺にて三部経を講説した際の講義録と伝えられる『無量寿経釈』を見てみると、広本『選択集』からの挿入部分を除いたいわゆる「古層」に、次のような説示が見られる。

此ノ身量之所得依正者、此則非二別者一、酬二六度万行修因一。四十八願一一無二相違一、如二本願一顕レ名所得依正者、聴聞人人、不レ申前知二食之一。若釈レ之、一一依正、依二四十八願一釈。別在レ之、可レ読レ之。(31)

『無量寿経』に説かれる阿弥陀仏の依正は、「四十八願の一一と相違なく」、説明せずとも聴衆はすでによく理解しているという。このような表現は、前述の慧遠の「上の所発の四十八願を遂げて、一々に別して対する相、顕らかなり」などの文を意識しているように思われる。続けて法然は、一々の依正を四十八願に基づいて解釈する書物がすでに存在しているとも述べている。その書物を特定することは難しいが、

『述文賛』のように、『無量寿経』の中の四十八願と依正二報との記述を具体的に照らし合わせる解釈が、法然当時すでに存在してことは確認できる。

その後、法然は「往生の行業」を説明する中で、「二一願成就〈諸有衆生聞其名号〉等文」[32]「上本願成就文、雖レ明二但念仏一…」[33]などと記す。憬興においては曖昧であった第十八願について、「諸有衆生、聞其名号、信心歓喜、乃至一念」[34]などの文を「本願の成就の文」として掲げるのである。それ以外の願の成就には言及しないことから、法然の関心はもっぱら第十八願に寄せられていることが読み取れる。

建久五年（一一九四）頃の説法録である『逆修説法』の一七日の説法において、法然は『無量寿経』の説明を始めるに際し、次のように説いている。

先無量寿経、初説二阿弥陀如来因位本願一、次説二彼仏果位二報荘厳一。然者此経説二阿弥陀仏修因感果功徳一也。則上巻初所レ説四十八願等、彼仏因位発願也。同巻奥及下巻初所レ説浄土荘厳并衆生往生因果、彼仏果位願成就也。一々本誓一々願成就、経文明也、不レ遑二具釈一。其中説二衆生往生因果一者、則念仏往生願成就之「諸有衆生聞其名号」文及三輩文也。[35]

法然は『無量寿経』の構成について大まかに説明する。上巻の前半は阿弥陀仏の「因位発願」が説かれ、上巻の後半から下巻の後半までには阿弥陀仏の「果位の願成就」、具体的には浄土の荘厳および「衆生往生の因果」が説かれるのだと説明している。「衆生往生の因果」という表現は憬興の科段を踏襲していると思われる。或いは「願成就」についても、慧遠や玄一を意識しているのかもしれない。[36]それに続けて法然は、「一々の本誓一々の願の成就せること、経文に明らかなり」と説いている。『逆修説法』三七日の説法においても、この一段とほぼ同内容のことが説かれるが、そこには「彼法蔵菩薩願、一々成就既成仏レ下シ[37]」とある。慧遠の文だけでなく、憬興の「法蔵菩薩の発す所の願は、皆な成弁有り」という文についても意識している感を受ける。

『逆修説法』五七日では、前半の依正二報に関する説法の中で、次のように説いている。

此等依報、皆阿弥陀仏功徳也。加レ之、有二自然衣服一、有二自然飲食一、非下依二行者自力業因一、得上併阿弥陀如来願力也。尓者阿弥陀仏功徳、非二必可レ云二相好光明一、如レ是依報皆、彼仏願力所成功徳也。[38]

憬興と同様、阿弥陀仏の「願力所成」の功徳だと説くのである。その際に「自然の衣服」を挙げる点も、憬興と共通する。また法然は、正報についても「都彼国人天目鼻非二我物一、皆仏願力所成之功徳也」[39]と説き、依正二報の説明を次のように結ぶ。

双巻経雖レ説下宝樹宝池有様諸菩薩声聞功徳上、経題唯云ニ無量寿経一者、其経中所レ被レ説諸功徳荘厳、併彼仏願力所成故也。[40]

『無量寿経』に説かれる諸の荘厳功徳は、すべて阿弥陀仏の「願力所成」なのだという。その解釈は憬興を踏襲しつつも、さらに徹底されている。[41]

同じく五七日の後半の『無量寿経』に関する説法において、法然は次のように説く。

然往生行 我等黠 今始可レ計事 不レ候。皆被二定置一事者也。…法蔵菩薩立二彼願一、兆歳永劫間難行苦行積功累徳、既成仏給 者、昔誓願一々不レ可レ疑、而善導和尚、引二此ノ本願文一曰、「若我成仏、十方衆生、称我名号、下至十声、若不生者不取正覚。彼仏今現在世成仏、当知、本誓重願不虚、衆生称念必得往生」云云。実我等衆生、取三自力許一而求二往生一、此ノ行等ハ為レ叶二仏御心一、又有レ不レ叶不審覚、往生不定可レ候。申二念仏一願二往生一人、非三自力可二往生一也。只他力往生也。本自唱二仏定置之名号一、乃至十声一声 令レ生給 者十声一声念仏一定可二 往生一、其願成就成仏給 云道理候。然者唯一向仰二仏願力一、可三決二定往生一也。以二我自力強弱一、不レ可レ思二定不定一。彼成就文在二此経下巻一。其文云、「諸有衆生聞其名号、信心歓喜乃至一念、至心回向願生彼国、則得往生住不退転」云云。凡四十八願、荘二厳浄土一。花池宝閣、無レ非二願力一。其中独不レ可レ疑二念仏往生願一。極楽浄土若浄土 者、念仏往生亦決定往生也。(42)

往生の行業は我々が今さら論じ始めるようなことではなく、すでに定め置かれていることのだという。善導の「彼の仏、今現に世に在して成仏したまへり、当に知るべし、本誓の重願、虚しからず」(43)等の文を根拠として、他力すなわち仏願力による決定往生を説き、第十八願成就文を重ねて説くのである。そして、五七日前半の説示を振り返るように、「凡そ四十八願、浄土を荘厳せり、花池宝閣も、願力に非ざること無し。其の中に独り念仏往生の願をのみ疑うことあるべからず」と説く。四十八願によって浄土は荘厳されたのだから、極楽の花も池も楼閣もすべて願力であるというのに、その中で念仏往生の願だけを疑うことができようかと呼びかける。この文は、ほぼそのまま『選択集』第三章にも継承される。

もっとも本論の冒頭で述べたように、『選択集』第三章では第十八願以外の願成就文が紹介される。

問曰、一切菩薩雖レ立二其願一、有二已成就一亦有レ未二成就一。未審、法蔵菩薩ノ四十八願已為二成就一、 将為レ未二成就一 也。答曰、法蔵誓願、一一成就。何 者、極楽世界中既無二三悪趣一。当レ知、是則成二就 無三悪趣之願一。何以得レ知。即願成就文云三「亦無二地獄餓鬼畜生諸難之趣一」(44)是也。又、彼国人天寿終之後、無レ更二三悪趣一。当レ知、是則成二就 不更悪趣願一也。以レ何得レ知、即願成就文云二「又彼ノ菩薩、乃至成仏不レ更二悪趣一」(45)是也。又、極楽人天、既以無レ有二一人 不レ具二三十二相一。当レ知、是則成二就 具三十二相願一也。以レ何得レ知、即願成就文云下「生二彼国一者 皆悉具中足 三十二相上」(46)(47)是也。

四十八願の成就についての問答は、前述の『逆修説法』三七日と同様、憬興の「諸仏所有誓願、雖有未必遂果、而法蔵菩薩所発之願皆有成弁」という文を意識していると思われる。しかし、憬興は『無量寿経』の上巻において願成就を指摘していた。それに対して法然は、第二「不更悪趣」と第二十一「具三十二相」願の成就文を『無量寿経』

下巻から見出している。

右の第二十一願の成就が説かれる部分については、『選択集』の草稿本である廬山寺本を見ると、一旦は「極楽人天、既以無好醜之別。当知、是即成就無有好醜之願也」[48]と、第四「無有好醜」願について記された上から、第二十一「具三十二相」願に書き直されている。廬山寺本において第三「皆悉金色」願が飛ばされているのは、『無量寿経』中に正報の身の色が金色であることを示す文章が存在しないためと思われる。憬興はその上巻の「彼仏国土諸往生者、具足如是清浄色身…」[49]という部分が第三願の「報」であると指摘しているが、法然はその説を継承しようとは考えなかったようである。[50]

第四願から第二十一願に訂正されたことは、兼岩和広氏[51]によって指摘されている。兼岩氏は、「本来、「無有好醜の願」の成就を明かすつもりで記したが、願成就の文の引用を間違えて「具三十二相の願」成就の文を引用してしまったために、後の訂正を行ったのであろうと考えられる」と推測し、「何かを書写して起こったという現象ではなく、その場で考えられ作られた文章であるからこそ起こった現象であると考えられる」と分析している。

書写ではなくその場で文章が作られたとする兼岩氏の見解に筆者も賛同するが、だからこそ第四願と第二十一願の成就文を間違える状況を想像し難い。まず第四願と第二十一願とでは願文が離れている。また第四願の成就文については、後の了慧および義山が指摘しているように、[52]「咸同一類、形無二異状」[53]という箇所と考えるのが妥当と思われる。その文にしても、憬興が指摘する「無極之体」[54]にしても、『無量寿経』の上巻にあり、下巻の「具足三十二相」の文とは離れている。

筆者は「彼の国に生まるる者は、皆悉く三十二相を具足す」という文と、前に引用された第二願の成就文とが、『無量寿経』中のすぐ近くに記される点に注目したい。法然および同席の弟子たちは第二願の成就文を記した後、そのすぐ側にある件の文を見て、第四「無有好醜」の願成就文として引用したのではないだろうか。往生人がみな等しく三十二相を具えるということは、容姿に相違や美醜の差がないということを意味すると拡大解釈できなくもない。もっとも「三十二相」とあることから、その文はむしろ第二十一願の成就文とするに相応しいと考え直し、訂正をおこなったのではないだろうか。[55]その場合、法然はやはり憬興の説を踏襲しなかったことになる。また法然は、四十八願すべての成就文をあらかじめ明確に見出していたわけではなかったということになる。

ここまでをまとめると、法然は慧遠や憬興の言葉を踏襲し、四十八願の一々の願は成就していると繰り返し述べている。また憬興の説を参照して、極楽浄土のすべてが「願力所成」であると解釈し、必要に応じて願成就文を指摘するが、憬興とは異なる文を挙げている。また法然はおそらく、すべての成就文を見出していたわけではない。四十八願すべての成就に言及することによって、「念仏往生」の願の成就を強調し、それに対する疑いを晴らすところに、法然の関心は寄せられていたのである。諸師の『無量寿経』末書と比較するならば、法然の独自性は「願成就文」という呼称を用いて一般化させた点と、憬興

においては曖昧であった第十八「念仏往生」の願成就文を明示した点にあると考えられる。

和文体の法然遺文である「三部経釈」には、次のような記述が見られる。

法蔵比丘いまた成仏し給はすとも、この願うたかふへからす、いかにいはんや成仏已後十劫になり給へり。信せすはあるへからす。「彼仏今現在成仏、当知本誓重願不虚、衆生称念必得往生」と釈し給へるはこれなり。「諸有衆生、聞其名号、信心歓喜、乃至一念、至心回向、願生彼国、即得往生、住不退転、唯除五逆、誹謗正法」文、これは第十八の願成就の文なり。願には乃至十念と、くといへとも、まさしく願成就のなかには一念にありとあかせり。つきに三輩往生の文あり。これは第十九の臨終現前の願成就の文なり。発菩提心等の業をもて三輩をわかつといえとも、往生の業は通してみな一向専念無量寿仏といえり。これすなはち、かのほとけの本願なるかゆえなり。(56)

漢文体の教義書と同様、第十八願の成就文が示されており、それに続けて第十九「臨終現前」願の成就文は三輩段だと説かれている。(57)

『無量寿経』の第十九願は、次のように誓われている。

設我得仏、十方衆生、発菩提心、修諸功徳、至心発願、欲生我国、臨寿終時、仮令不与大衆囲繞現其人前者、不取正覚。(58)

菩提心を発し、諸功徳を積むことで臨終時に阿弥陀仏が現前することが誓われており、念仏には言及されない。それに対して、『無量寿経』下巻の三輩段では、上輩に次のような記述がある。

上輩者捨家棄欲而作沙門、発菩提心、一向専念無量寿仏、修諸功徳、願生彼国。此等衆生、臨寿終時、無量寿仏、与諸大衆、現其人前、即随彼仏往生其国…(59)

僧となって菩提心を発して、「一向専念無量寿仏」すなわち念仏を修し、諸功徳を積むことにより、臨終に阿弥陀仏が現前すると説かれており、ほぼ完璧に第十九願文と一致する。一方、中輩には在家の立場でも行じることのできる善行と発菩提心と念仏とが挙げられ、臨終時には阿弥陀仏が化現すると述べられる。さらに下輩に至っては「不能作諸功徳」(60)とあり、発菩提心と念仏という二種の行のみによって、臨終時には夢中で阿弥陀仏を見ると説かれる。この三輩の文を第十九願成就文と捉えるならば、「修諸功徳」に関する相違が大きな意味を持つと考えられるべきところであろう。ところが法然は「発菩提心等の業をもて三輩をわかつといえども、往生の業は通してみな一向専念無量寿仏といえり」と、三輩すべてに共通して念仏が説かれるという点に力点を置く。

「逆修説法」五七日では、三輩段について次のように説かれている。

此三輩文中、雖挙菩提心等余行、望上仏本願意、在衆生一向専念無量寿仏。故云一向。即又、観念法門善導釈曰、「又、此経下巻初云、仏説、一切衆生根性不同、有上中下。隨其根性、仏皆勧専念無量寿仏名。其人命欲終時、仏与聖衆、自来迎摂、尽得往生」已上。此釈心、三輩倶念仏往生也。(61)

善導が『観経』の流通分に対して述べた「上来雖レ説二定散両門之益一、望二仏本願一、意在三衆生一一向専称二弥陀仏名一」[62]という解釈を、法然は『無量寿経』解釈にも転用する。また『観念法門』の「一切衆生、根性不同にして上中下有り。其の根性に随て、仏皆勧めて、専ら無量寿仏の名を念ぜしむ。其の人、命終らんと欲する時、仏と聖衆と自ら来て迎摂して、尽く往生を得せしむ」[63]という文を引用し、「三輩倶に念仏往生なり」と主張する。平板な構造で解釈するならば、念仏行と発菩提心をはじめとする余行との兼行と受け止められるべきところを、善導および法然は、念仏と余行とを切り離すという二重構造で捉え直す[64]。それによって三輩段の主旨は、諸行の実践とそれに伴う来迎の格差を示すことではなく、念仏によって必ず阿弥陀仏が「自ら来りて」来迎することなのだと受け止めるのである。

このように解釈された三輩段を願成就文と位置付けることにより、その因である第十九願文も二重構造で理解されることとなる。よって法然は「三部経釈」で次のように説く。

かならず臨終の時には、みつから菩薩聖衆に圍繞せられて、その人のまえに現せんとちかひ給へり。第十九の願これ也。これによて臨終の時いたれは、ほとけ来迎し給ふ。行者これを見たてまつりて、心に歓喜をなして、禅定にいるかことくして、たちまちに観音の蓮台に乗して、安養の宝池にいたる也。これらの益あるかゆえに、「念仏衆生摂取不捨」といふなり[65]。

法然にとっての第十九願は、念仏の一行によって、必ず「臨終現前」「現前導生」「来迎引接」を得られることが誓われている願、ということになる。法然および善導の解釈が色濃く反映しているという点で、この第十九願成就文も特徴的と言えるであろう。

五、おわりに

今回、同一『無量寿経』の中に四十八願すべての「願成就文」があると明確に指摘したのは法然が初めてではないかという金子氏の推論を起点として、四十八願成就文の起源と、それに対する法然の解釈の意義を探った。

浄影寺慧遠・吉蔵・法位・義寂・玄一・憬興の『無量寿経』末書の中に「願成就文」の用例は見つからなかった。もっとも、『無量寿経』上巻後半以降の依正二報の説明がなされる段について、浄影寺慧遠は「成就」、玄一は「願成就」と呼称している。あるいは法然は、それらの記述より着想を得たのかもしれない。

その『無量寿経』の依正二報の説明の中に四十八願の一々と対応し、成就を示す文があるということについては、慧遠が述べている。また憬興は、『無量寿経上』巻の後半を解釈する中で、二六種の願の成就を指摘している。『無量寿経釈』の記述から、法然が『無量寿経』の四十八願と依正二報との記述を対応関係で捉える解釈があらかじめ存在することを知っていたことが確認できる。

法然は、四十八願の一々が成就していることを繰り返し説くが、それは第十八「念仏往生」の願の成就を強調し、それに対する疑いを晴らすためである。『選択集』の草稿本である廬山寺本の第三章の訂正箇所について分析すると、法然は憬興によって示された成就文を踏襲

しようとはせず、また四十八願すべての成就文を特定していたわけでもないことが読み取れる。

憬興は『無量寿経』下巻の説明について解釈する際には、四十八願に言及しない。それに対して法然は、下巻冒頭の文をもって第十八願の「成就文」と明示し、続く三輩段を第十九願成就文とする。善導・法然の念仏思想が強く投影されている、これら二種の願成就文にこそ法然の独自性が見て取れる。

〈注〉

（1）筆者はこれまでに「法然の念仏思想における本願の意義」（『佛教論叢』五五、二〇一一）、「法然と静照の浄土教―四十八願の解釈をめぐって―」（『共生文化研究』五、二〇二〇）などの論文を発表している。

（2）『昭法全』三二一頁、土川勧学宗学興隆会本三六頁。

（3）『原始浄土教の研究』三八九頁（岩波書店、一九七〇年）。

（4）『原始浄土教の研究』三九六頁。

（5）金子氏は、香川孝雄著『無量寿経の諸本対照研究』（永田文昌堂、一九八四年）においても、『無量寿経』の本文中より二九種の成就文が指摘されるに止まる点に言及している。

（6）「願成就文考」（『印仏』四四―一、一九九五年）、「法然上人の本願成就文について」（『仏教論叢』四〇、一九九六年）、『浄土教学論攷』（文化書院、二〇一六年）。

（7）『浄全』十、二一七頁下。

（8）『浄土教学論攷』二八頁。

（9）『浄土教学論攷』二八頁。

（10）『浄全』五、三一頁下。傍線は筆者が書き入れた（以下同）。

（11）『浄全』五、三五頁上。

（12）『浄全』五、五六頁～。

（13）恵谷隆戒「新羅法位撰無量寿経義疏の復元について」（『浄土教の新研究』三九三頁～、山喜房仏書林、一九七六年）。

（14）『浄全』五、七六頁～。

（15）南宏信「身延文庫蔵新羅義寂撰無量寿経述記　巻第一（断片）解題・影印・翻刻」（国際仏教学大学院大学日本古写経研究所文科省戦略プロジェクト実行委員会編『日本古写経善本叢刊第五輯　書陵部蔵玄一撰無量寿経記　身延文庫蔵義寂撰無量寿経述記』一〇一頁～、二〇一三年）、恵谷隆戒「新羅義寂撰無量寿経述義記復元について」（『浄土教の新研究』四〇九頁～）。

（16）恵谷隆戒著『浄土教の新研究』四二〇頁。

（17）恵谷隆戒著『浄土教の新研究』四二〇頁。

（18）新文豊出版公司影印卍続蔵経会編印『卍続蔵経』三二、四〇〇頁上。南宏信「新羅玄一撰無量寿経記解題・影印・翻刻」四二頁（国際仏教学大学院大学日本古写経研究所文科省戦略プロジェクト実行委員会編『日本古写経善本叢刊第五輯　書陵部蔵玄一撰無量寿経記　身延文庫蔵義寂撰無量寿経述記』、二〇一三年）。

（19）『浄全』五、一三〇頁上。

（20）『浄全』五、一三七頁下。

（21）『浄全』五、一三八頁下～一三九頁上。

（22）憬興に関する先行研究においては、四十八願の願名や摂法身願・摂浄土願・摂衆生願の分類の仕方、第十八～第二十願の位置付などについては注目されるが、願成就の文を指摘する点についてはあまり注目されていないようである。姜昌鎬「憬興の仏身観―『無量寿経連義述文賛』を中心として―」（『印仏』四四―一、一九九五年）では、第十二願と第十七願の成就文に言及されている。

（23）藤堂恭俊「法然浄土教における新羅浄土教の摂取―法然浄土教に見出される宗教体験の一特徴―」（藤堂恭俊博士古希記念会編『浄土宗典籍研究』研究篇、一九八八年）など。

（24）『浄全』五、一三九頁下。各願の成就を指摘する部分について、それが第何願にあたるのか、括弧内に数を筆者が記した（以下同）。

(25) 『浄全』五、一三九頁下～一四〇頁上。
(26) 『浄全』五、一四〇頁下。
(27) 『浄全』五、一四〇頁下～一四一頁上。
(28) 『浄全』五、一四一頁下。
(29) 『浄全』五、一四二頁上～上。
(30) 『浄全』五、一四四頁上。
(31) 『昭法全』七九頁。
(32) 『昭法全』八七頁。
(33) 『昭法全』九一頁。
(34) 『浄全』一、一九頁。
(35) 『昭法全』二三六～七頁、『黒谷上人語灯録写本集成』一、一五五頁。
(36) 法然が玄一の『無量寿経記』に目を通しているのか定かではないが、南宏信氏（「書陵部蔵新羅玄一撰『無量寿経記』巻上改題」）によると、興福寺の僧である永超（一〇一四―一〇九五）編の『東域伝灯目録』や、法然の門弟である長西（一一八四―一二六六）撰『浄土依憑経論章疏目録』などに、その書名が掲載されているという。
(37) 『昭法全』二五三頁。『黒谷上人語灯録写本集成』一、二一一頁。
(38) 『昭法全』二六二頁、『黒谷上人語灯録写本集成』一、二四二頁。
(39) 『昭法全』二六三頁、『黒谷上人語灯録写本集成』一、二四三頁。
(40) 『昭法全』二六三頁、『黒谷上人語灯録写本集成』一、二四四～五頁。
(41) この点については、拙論「法然における極楽浄土」（「共生文化研究」六、二〇二一年）で論じている。
(42) 『昭法全』二六六頁、『黒谷上人語灯録写本集成一』二五四～六頁。
(43) 『往生礼讃』（『浄全』四、三七六頁上）。
(44) 『無量寿経』上（『浄全』一、一二頁）。
(45) 『無量寿経』下（『浄全』一、二二頁）。
(46) 『無量寿経』下（『浄全』一、二一頁）。
(47) 『昭法全』三二〇～一頁、土川勧学宗学興隆会本三四～六頁。
(48) 大正大学浄土宗宗典研究会編『『選択集』諸本の研究〈資料編〉』一・廬山寺本、原本写真版、三〇～一頁（文化書院、一九九九年）。
(49) 『浄全』一、一六頁。
(50) 後の了慧（一二四三―一三三〇）著『無量寿経鈔』や、義山（一六四八―一七一七）著『無量寿経随聞講録』は、憬興の説を継承している（『浄全』一四、一五五頁上、三八七頁下）。
(51) 「廬山寺蔵『選択集』第三章について」（『仏教論叢』四三、一九九九年）。
(52) 『浄全』一四、一五五頁下、三九〇頁下。
(53) 『浄全』一、一七頁。
(54) 『浄全』一、一七頁。
(55) 筆者は文献学的知見に浅く検証はできないが、可能性のみ記すと、あるいは「是れ即ち無有好醜の願の成就なり」まで記した時点で、第四願の成就文を探そうとしたが、止めてすぐに成就文が見いだせる第二十一願に変更したと考えることもできよう。その場合も、憬興の説を踏襲せず、またすべての成就文をすぐ記せる状況になかったという点に変わりはない。
(56) 『昭法全』二九頁、『龍谷大学善本叢書十五　黒谷上人語灯録（和語）』一一～一二頁、五五九頁上。
(57) 三輩段をもって第十九願成就文とすることは、良忠（一一九九―一二八七）撰『浄土宗要集』（『浄全』一一、七二頁上）、了恵撰『選択大綱抄』（『浄全』八、二九頁下）義山撰『大経随聞講録』（『浄全』一四、四〇三頁上）にも記されている。
(58) 『浄全』一、七～八頁。
(59) 『浄全』一、一九頁。
(60) 『浄全』一、十九頁。
(61) 『昭法全』二六七頁、『黒谷上人語灯録写本集成』一、二五六～七頁。
(62) 『浄全』二、七一頁下。
(63) 『浄全』四、二三三頁上。

（64）法然の三輩段解釈については、拙論「法然における『無量寿経』三輩段の解釈」（『東海仏教』六四、二〇一九年）を参照されたい。

（65）『昭法全』三二頁、『龍谷大学善本叢書十五　黒谷上人語灯録（和語）』一七頁、五六〇頁下。

（さいとう　むとう　仏教学科）

二〇二二年十一月十五日受理